



平成30年9月13日

報道関係各位

海外9カ国の研究者との共同研究の成果論文
「共同目撃者の話し合いによる記憶の変容の10カ国での再現研究」
認知と記憶についての応用研究専門学術誌 *Journal of Applied Research in
Memory and Cognition* 掲載決定のお知らせと取材のお願い

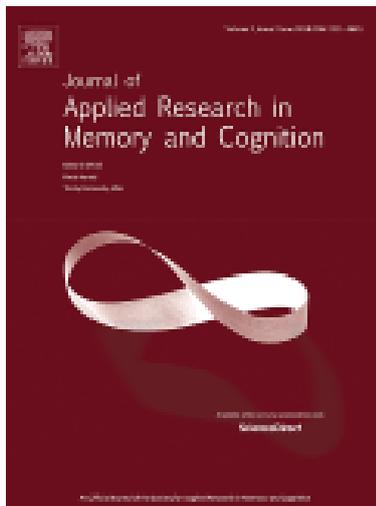
拝啓 初秋の候、貴社ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、本学教育学部守教授がリーダーとなって海外の研究者と共同で推進してきている目撃者の記憶変容研究の成果の一部が「認知と記憶についての応用研究専門学術誌 *Journal of Applied Research in Memory and Cognition*」に採択され、近々公刊されることとなりました。この研究は、偏光サングラスを使った提示トリックによって実際には異なる映像を2人の目撃者（実験被験者）に提示し、その後、目撃者間で何を見たのかについて話し合いをさせると、実際には自分では見ていないことをあたかも目撃したかのように報告してしまうという現象を実験室で実証したものです。この現象そのものは、守教授がニュージーランドの研究者と共同で2008年に見出し「応用認知心理学誌 *Applied Cognitive Psychology*」に発表していたものですが、そうした現象が、日本、ブラジル、カナダ、コロンビア、インド、マレーシア、ポーランド、ポルトガル、トルコ、イギリスの10カ国で共通に見られることを確認しました。論文は既に *PsyArXiv* に公開されています。



偏光サングラスをかけると違う映像が見える



認知記憶応用研究学術誌

心理学の実験研究で見出されたことの多くは、別の実験室でなかなか再現されないという問題提起がなされ、「心理学研究への信頼性の危機」と呼ばれています。こうした中で、守教授は国際的な研究チームを組織し、自身が10年前に見出していた現象を日本を含む10カ国で再現し、その現象が文化を超えて確実に生じることを確認しました。この研究で特筆に値することは、ブラジルなどの南米や、トルコから日本までのアジアの広い範囲からのデータを採取したことです。

つきましては、ご多忙のところ誠に恐縮ですが、本研究について報道関係各社を通じて地域の皆様に広くご紹介頂くとともに、取材をよろしくお願い致します。

敬具